

〈研究資料〉

もどって来た『喫茶養生記』

村井康彦

一

建保二年（一一二四）二月、伊豆二社（箱根、三嶋社）の参詣から帰った將軍実朝が、御家人の設営する宴席での「御淵酔の余氣」、つまり二日酔いで翌日病惱気味であったのを、たまたま寿福寺にいた葉上僧正こと榮西が聞き、さっそく良薬と称して茶一盞を進め、副うるに「所_レ誉_二茶徳_一之書」一巻を以てしたところ、快癒し御感悦に及んだという。『吾妻鏡』に記すところであるが、その茶徳を誉める書というのが『喫茶養生記』に他ならない。「茶也（末代）養生仙薬（人倫）延齡妙術也」（丸カッニ内は異治本）（_レにはない文字、後述））ではじまる本書は、文字通り茶のもつ功能_二茶徳_一を説いた書である。

ただし『吾妻鏡』の記事には、いささか気になる点がある。一つは、一碗の茶とともに、その機能を記す書を進めたという手回しのよさである。おそらくこれは二回にわたるやりと

り——余氣が直ったことで実朝から茶について尋ねられることがあり、そこで『喫茶養生記』を参考までに供した——を一日の記事としてまとめたものではなからうか。こうした記事の類聚化は編纂物にしばしば見受けられる手法で注意を要するところである。もっとも、その頃榮西は『喫茶養生記』を執筆したばかりであったから、実朝の求めに即応することはできたのである。

二つは、『喫茶養生記』は上下二巻から成っていたが、進上したのは一巻としてのことである。あとに述べるように、茶のことは上巻に書かれており、一巻とは上巻だけとみられなくはないからである。しかしこれは、上下巻を合わせての一冊仕立であったとみるべきであらう。

榮西は二度入宋し、抹茶（法）を伝えたのは二度目の帰朝時——建久二年（一一九二）七月——と考えられる。このとき帰着した肥前平戸島の芦浦をはじめ、以後各地に榮西ゆか

りの茶園が簇生することになるが、榮西が抹茶法を伝えたことを明示するのは、その著『喫茶養生記』の他にはない。そのなかにある「茶の調整法」と「喫茶法」の記述は、間違はなく抹茶のつくり方、飲み方であり、しかもそれらは榮西自身、在宋中の見聞にもづくものであることを表明している。³

ところで『喫茶養生記』はもっぱら茶に関する書物として理解されているが、詳しくいえば茶について述べているのは上巻であって、下巻は桑に関する記述である。陸羽の『茶経』になぞらえ、『茶桑経』とも呼ばれたゆえんである。

しかし紛らわしいのは、上巻は茶、下巻は桑といういい方も、じつは正確でないことである。それというのも下巻のなかにごく一部ながら茶についての記述（『喫茶法』）があり、上巻は茶のことといえても、下巻は桑のことだけといいたくないのである。桑に関する記述のなかになぜ茶の飲み方が取められているのかについては、あらためてのちにふれよう。

二

ところで『喫茶養生記』は二度にわたって書かれている。そこでこれを初治本・再治本というが、それぞれの識語によつて、初治本は承元五年（一一二一）正月一日から三日の間に、再治本は三年後の建保二年（一一二四）正月（中）²に書き上げられたことを知る。当然考えられるように、文章にも多少差異があり、冒頭の文言でいえば、先きに引用したよう

な違いがあり、全体に後者の方が簡潔になっている。ただし初治本・再治本ともに自筆本はない。前者に属する寿福寺本は、かつては榮西の自筆と考えられたこともあるが、鎌倉末か南北朝室町初期の写本である。しかし写本のなかではもっとも古く、重要文化財に指定されている。もと鶴岡八幡宮の供僧坊、等覚院の什物であったが、等覚院が明治初年の廃仏毀釈によって廃絶した際、仁王像などとともに寿福寺の有に帰したものと考えられている。

残念なことに、この寿福寺本は、下巻の六丁目が一丁分欠けている。もとより和本であるから袋綴の、二つ折りの紙一枚分である。前述のように初治本と再治本とで文言に違いがある以上、初治本の原態を忠実に知ることはまず不可能とされてきたわけである。

ところが最近、その寿福寺本の、まさに欠けた一丁分が「出て来た」のである。素朴ながら軸物に仕立てられ、端裏に「契茶文（喫）建仁開山榮西禪師真筆 圖通」と記されている。所藏者は京都在住の伴實氏で、昭和六十一年三月、京都市内の古書籍商より購入されたものという。一日、畏友京都国立博物館の下坂守氏とともに来訪され、その一丁分を示された。字体や調点などから判断して、寿福寺本の断簡であることは明らかである。多少とも茶の歴史的研究に携っている者として、紹介の機会を与えられたことに謝意を表したい。

この一丁分が抜き取られた時期や経緯は明らかでないが、



一服桑葉法

四月初採影干、秋九月三分之二落、一分殘枝採、
又影干、末、如茶法服、一如茶法服之、服中無疾、
身輕心利、四月葉九月葉等分、以秤計之

一服桑椹法

熟時收之日乾、為末、以蜜丸、桐子大、空心酒服、
卅丸、每日長服、身輕無病云々

一服高良薑法

此藥大宋國、高良郡之薑也、大國契巨・高麗
同貴重之、末世妙藥只是許也、治、近來之万病、
也、細末之、一錢投、酒服之、斷、酒人以湯服之、又煎

服之、但用力弱矣、粥米飲和服、皆好乎、多少
遲速答為期、

一喫茶法

白湯水去也極熱、點服之、錢大匙二三匙、多少隨
意、但湯少好、其又隨意、以來以濃為美、食飯飲
酒之次、必喫茶消食、引飲之時勿飲他湯、偏可喫
茶也、引飲時桑湯茶湯不飲、則生種々病、茶功
能上已記畢、此茶諸天嗜愛、仍供天等一時獻茶、
不供茶不供茶

「則其法不成就矣」

宋人歌云、疫神捨駕、禮茶木、是故草拾遺云、文之（後略）

（注）

①多和文庫本（以下多本と略称）は「卅丸」②多本、「故也」③多本、「粥」
なし④多本、「隨意云、殊以濃」この部分、寿福寺本に錯簡あるか
⑤脱落分の追記⑥多本、ここで改行するも、前文に継続しており、寿福寺本
にみる、このような余白はない。

先きに記した端裏書の文字は江戸後期とみられるから、鶴岡八幡宮等覚院にあった時分のことであろうか。またこの端裏書は円通なるものによる極め書きとみられるが、円通については、何人かの同名の僧が知られるなかで、晩年江戸増上寺恵照律院に住んだ円通か、ほぼ同じ時期の博多聖福寺仙厓義梵が考えられるが、榮西との因縁からいえば後者の円通が、可能性としてはもっとも高そうだ。ただしきめ手はない。

その一丁分(写真と釈文)は二一五頁に掲げる通りであるが、書写時の書き落しの追加とか、とくに訓点部分にあとからの書き入れや抹消などがあり、判読できない部分もある。しかしこれによって寿福寺本はもとより、初治本の全体が復元できた意義はまことに大きい。

三

さて『喫茶養生記』の初治本のことをいうのに、これまでのもっぱら寿福寺本で進めて来たが、この系統に属するものとして、以前から香川県志度町の多和文庫本の所在が知られていた。江戸初期の写本であり、梅尾高山寺の子院、闕伽井坊の旧蔵になるものであるが、同院が江戸初期に廃絶した前後にか流出、明治初年、琴平宮の禰宜であった松岡潤氏の手に入り、多和文庫のものとなったという。

じつはこの多和文庫本の『喫茶養生記』の発掘には、私にとっていささかニガイ思い出がある。いまからざっと四

十年前の学生時代、京都大学史学料研究室の見学旅行で四国方面に出かけた際、多和文庫の所蔵になる古文書類とともに閲覧したのが『喫茶養生記』との最初の出会いである。歴史を学びはじめていた頃のこととて、その時、『喫茶養生記』には初治本と再治本とがあること、それまで前者の唯一のものとしていた寿福寺本は一丁欠けていること、ましてや多和文庫本が初治本系であり、しかも全丁揃っていること、など、知りもしなかったし思いもしなかった。

それから十数年がたって、『茶道古典全集』(淡交社)に収める『喫茶養生記』を故森鹿三氏が校訂解題に当られることになった。そこで私は、この全集全体に関わられた永島福太郎氏に、四国の多和文庫にも一本がある由を申し上げたのだ。前記のことも分ったのは、それから間もなくのことである。知っていたらむろん史料紹介の一つでも書いていただろうに、あとの祭りとはこのことであろう。いまは昔の物語である。

そんなわけで、『茶道古典全集』二巻『喫茶養生記』では、初治本の寿福寺本と多和文庫本とを底本とし、欠けた部分は多和文庫本で補っているが、寿福寺本にある訓点が多和文庫本にはないので、古い写本である寿福寺本を基準とする限り、多和文庫本をもつてしても、より古い姿に戻すことはできなかったのである。その点、今回の出現にまさるものはないわけである。

四

欠けた一丁分が出て来たことの意義は、おおよそ以上の如くであるが、私の興味を惹いたのは、抜き取られた一丁分の個所である。その個所は、桑のことが書かれている下巻であり、しかもそのなかに紛れ込んでいるような形で喫茶法のことが書かれている——考えてみると、抜き取るのにこれ以上よい個所はない。そのことはむろん以前から分っていたことであるが、こうしてその部分を実際に手にしてみると、抜き取った意図があらためて見えてくる。けだしこの抜き取りは智能犯に類するといつて過言ではないであろう。

ここに来て、『喫茶養生記』上下巻が、なぜ茶と桑の書であるのか、茶の飲み方がなぜ桑の巻にあるのか、あらためて考えてみる必要があるであろう。

『喫茶養生記』は、先きの森鹿三氏の本文校訂により、記述の大部分は宋代の勅撰百科事典である『太平御覧』のうち「茗」の項に依拠していること、しかし引用文献のない「茶の調整法」とこの「茶の喫し方」の部分だけはオリジナル、すなわち榮西自身の入宋中の見聞、体験にもとづいて記述していることなどが明らかにされたが、喫茶法については、中国の習俗であった「一茶一湯」と無関係ではないであろう。

一茶一湯とは、來客をもてなすのに茶湯や薬湯をもってしたことをいうが、この場合の薬湯は、いわゆる草根木皮を煎

じて飲む漢方薬の類ではなく、柑橘類などを用いた嗜好品に近いものを指す。それを宋代では來客の接待に用いていたというのである（田中美佐「宋代の喫茶（喫茶）」『漢学』四十三、一九八八年）。とすれば榮西も入宋中、この種のもてなしを各地で受け、茶とともに薬湯を喫する機会があったとみてよいであろう。榮西はその薬湯のうち桑をもっとも好ましいものと受けとめ、茶とともにその知識と技法とを伝えたものと思われる。榮西にとって茶と薬湯としての桑とは不可分のものであった。それが『喫茶養生記』が茶と桑の書となった理由であり、喫茶の法を桑の服用法とならんで記述したのは、榮西にとってはごく自然な扱いだったのである。

しかしそのため喫茶法の記事が下巻に孤立したのを幸いに、好事家の手によりひそかに抜き取られたというのが真相であろう。この部分が「契（喫）茶文」と呼ばれ、軸物に仕立てられたゆえんである。

注(1) 森鹿三氏は「茶の徳を嘗むる所の書」一巻を、『喫茶養生記』とは書名がちがうこと、一巻と二巻の差のあることから、別ものとし、『喫茶養生記』のなから茶に関する部分を析出したものとみているが、考え過ぎであろう。「喫茶養生記」補注（『茶道古典全集』第二巻）。

(2) 再治本は上巻の序の末尾に、「于建保二年甲戌春正月謹叙」とあり、下巻末尾に談話がないが、初治本が三日で書かれて

いることから、下巻もふくめて正月中に書き終っているとい
てよいであろう。なお本文では書かなかつたが再治本には建
仁寺本以下教種類がある。森氏前掲書参考。

(3) 上巻第六章の茶の調整法には、「朝の間に摘み取った茶葉
を早速蒸し、その日のうちに乾燥し始め、焙棚で緩急よろし
く、徹夜して翌曉までに焙り終える。これを上等の茶瓶に入
れ、竹の葉で密封すれば、何年も変質しない」とあり、下巻
の「喫茶法」では、「茶は非常に熱い白湯で服用するのがよ
い。その量は一文錢大の匙で二、三匙、多少は随意であるが、
湯は少な加減にし、ことに濃い茶が美味しい」と述べていて、
抹茶のつくり方・飲み方であることがわかる。榮西の抹茶伝
来については、時期的にいつて、もち帰ったという茶の葉の
発芽が不可能であるといった理由から、一時期、否定説が強
く打ち出されたことがあるが、必ずしも不可能ではないこ
とが実証された（橋本実「茶の起源を探る」、一九八八年）。
かりに茶の葉や苗をもち帰らなくても、右に述べたようにに
つくり方、飲み方を伝えており、抹茶法の伝来者であること
を否定する理由はまったくない。

(4) 円通については『日本仏家人名辞書』『続近世畸人伝』な
どで以下の教名が知られる。

①紀伊光明寺開山。独湛禪師（黄檗宗）に参禪、宝永頃（一
七〇四〜一一）の人。②三河妙源寺（真宗高田派）住持。

号功德院。寛政三年（一七九一）正月二十二日没。
③江戸増上寺惠照律院（天台宗）住持。俗姓山田氏。はじめ
日蓮宗のち天台宗に属す。山城積善寺に任し、晩年輪王寺

宮の命により惠照律院に任す。天保五年（一八三四）九月
四日没。字珂月、号無外子。

④博多聖福寺（臨濟宗）住持の仙厓義梵。普門円通禪師、号
円通・天民・虚白。天保八年（一八三七）没。

（補注）

(1) 表装関係については伴氏から以下のような説明があった。
「二文字」の裂地は明代の茶地蜀江錦、「上下」「中廻し」は
共紙で厚手の「しけ唐紙」（「あさぎ色」の「しけ引き」の染
め）、大きさは半紙判で、幕末・明治期の唐紙より小さく、江
戸中期のものか。「表木」も江戸期。「総裏」の紙の継目も
「樺つき」という古い方法（江戸末・明治期では「くいきき継
ぎ」）で行われている。以上の諸点から江戸中〜後期の表装
になるか。

なお入手時、「軸先」は失われており箱もなかったとのこ
とである。

(2) 寿福寺本『喫茶養生記』（袋綴、26.9×19.0 cm）は現在裏
打ちされており、欠けた一丁分は白紙が添えられている。

（後記）この紹介文の作成に当っては、所蔵者の伴實氏、
および京都国立博物館下坂守氏の協力を得たことを記し謝意
を表す。